

# 東南アジア史学会会報

2002年10月

第77号

## 目次

2002年度春季会員総会摘録 .....	3
第19期第2回委員会摘録 .....	5
2001年度決算報告・2002年度予算報告 .....	9

## 第67回研究大会報告

### <自由研究発表要旨>

A 4本『大越史記続編』小考 .....	蓮田 隆志 13
アユタヤの対明関係——外交文書から見る. ....	ピヤダー・ションラオーン 14
19世紀中部ジャワ北海岸におけるイスラーム指導者とプリヤイの葛藤 ——アフマッド・リファイ運動をめぐる言説を分析して .....	菅原 由美 15
パンテアイ・クデイ遺跡(シェムリアップ・カンボジア)発掘調査報告 ——274破片の仏像出土からみる12世紀末から13世紀のアンコール ...	丸井 雅子 16
紅河平原低地域の村落形成に関する考古学的研究	
——ナムディン省バッコック村の調査から .....	西村 昌也、西野 範子 18
カレン系民族の分類に関する諸問題 .....	新谷 忠彦 20

趣旨説明 .....	渡辺 佳成 22
トンキンの生糸貿易——V O C 資料から .....	奈良 修一 23
ムラウー王朝前半期(1430-1700)における海上貿易とアラカン. ....	エーチャン 24

## 資料・研究短報

### 東南アジアの中国語出版物

-立教大学所蔵「Goh Collection」について. ....	舛谷 銳 25
ベトナム農民・農村に関する国際シンポジウム. ....	小川 有子 26

地区例会報告 .....	28
新入会員・住所変更など .....	31
事務局から .....	37



---

## 2002 年度春季大会会員総会摘録

---

2002 年 6 月 2 日、神田外語大学において会員総会が開催された。伊東利勝会員が議長に選出された。

### 1. 会長挨拶（倉沢会長）

会長より第 19 期委員の紹介があった。空席となっていた、北海道／東北地区の委員には宮本謙介会員が任命された。また、中国／四国地区委員として、八尾隆生会員に加えて泉川普会員が新たに任命された。

\*なお、会則にのっとり、この紹介をもって第 19 期役員（委員）の決定がなされたものとする。また、総会後の 6 月末、中部地区委員の中島健太会員が一身上の都合により委員を辞職した。後任の選出はなかった。

### 2. 報告事項

#### (1) 総務

- ・会報 76 号を発行した。今回は短報欄がなかったため、次回からは寄稿を願いたい。
- ・会員数の報告。5 月 31 日現在の会員数：622 名、ここから大会期間中の新入会者 6 名を加え、除籍予定者 28 名を除くと、会員数 600 名になる見込みである。

#### (2) 大会

- ・今回 67 回大会の報告者が急病のため一人減った。

#### (3) 編集

- ・前期編集委員より、31 号完成の報告と説明があった。
- ・今期編集委員より 32 号に関する英語論文掲載について

山川出版社と協議の結果、印刷代が高くなるため英語論文の掲載については当面おこなわないこととし、英語情報の発信方法については、検討を継続する

#### (4) 情報化

- ・東チモールリンク集を独立する（情報提供のお願い）
- ・文献目録の投稿フォームの運用を開始する
- ・会報ごとの電子版名簿を更新する

## (5) 涉外委員

- ・IAHA (The International Association of Historians of Asia) 第17回大会が 本年12月18日より、バングラデシュのダッカ大学で開催される。

## (6) その他

- ・故山本達郎会員のご遺族からのご寄付に関して（石井米雄会員）

山本会員のご遺族から東南アジア史学会に寄付された 1000 万円は、「東南アジア史学会賞」の創設にあてる。賞の細目に関しては、石井米雄会員、鈴木恒之会員、池浦雪浦会員、桃木至朗会員からなる委員が検討する。

## 3. 審議事項

### (1) 決算について

- ・前期会計委員より 2001 年度（2001 年 1 月 1 日～2001 年 12 月 31 日）の決算報告があつた。→ 9 頁参照

### (2) 監査報告（白石昌也会員/代理・嶋尾稔会員）

- ・2001 年度会計監査報告があり、決算報告ともども承認された。

### (3) 予算案

- ・会計委員より 2002 年度予算案の提案があり、原案通り承認された。→11 頁参照

### (4) 次回以降の大会開催校

- ・今期における研究大会について以下の各大学で開催する旨、提案があり、承認された。

第 68 回…岡山大学

第 69 回…東京外国语大学

第 70 回…神戸大学

### (5) 次回からの大会のあり方への提案

19 期委員会として次期研究大会の形式を変えたい旨提案され、承認された。

・提案趣旨：研究大会が、学際性を維持し、狭い意味での史学の範囲を超えて多くの会員が参加できるように改善していきたい。

・具体的提案：現在の 2 日目シンポジウムに代えて「自由企画」公募を行う。当面、次回岡山大会に限った提案とし、その後の大会については新たに議論していくこととする。

## 第19期第2回委員会摘録

2002年6月1日、2日の両日、神田外語大学において第19期第2回委員会が開催された。出席者は以下のとおりである。

出席者：倉沢愛子、嶋尾稔、内藤耕、石井香世子、菊池陽子（2日のみ）、遠藤聰、鈴木恒之（1日のみ）、桃木至朗、飯島明子、岩城高広、山本博之、中野聰、渡辺佳成、貞好康志、植村泰夫、石井米雄、土佐桂子、林謙一郎、糸林誉史、押川典昭（2日のみ）、奈良修一、加納寛、深見純生、八尾隆生、高田洋子（2日のみ）以上、敬称略

### <報告事項>

#### 1. 総務委員より（嶋尾委員）

- ・大会プログラム等を発送した
- ・会報76号を発行した
- ・科研審査員候補者を倉沢会長に選んでいただき推薦した
- ・学術会議へ登録申請した
- ・会員動向

2002年5月31日現在 登録者数 622名

住所不明者 7名、2002年会費未納者 264名、2001年の未納者 114名

2000年度以前からの未納者 52名 1999年度以前からの未納者 28名=除籍予定者

除籍予定者を除いた会員数：594名

大会案内送付数（住所不明・2年以上の滞納者を除く）：566名

督促：4分の1以下の反応

会全体の会員数の動向：停滞もしくは衰退の局面かと思われる

- ・会員管理に関する総務からの提案：除籍予定者 28名に対し、大会後「除籍通知」を送る。なお、一部に対しては個別的に対応する。
- ・除籍後の再入会について：

「委員会もしくは会議にかけて許可が必要なのではないか」「再入会の前に、前の負債を支払ってからでないと入会できないことにすべきでは」などの意見が出され、今後、総務において検討していくことになった。

#### 2. 編集

- ・31号は薄かったので経費を抑えることができた。32号は特集号の方向で検討している。
- ・英語論文掲載について、山川出版に経費面を問い合わせたところ、組版代が3割ほど高

くなるとのことであり、難しいと思われる。

会員の英語の業績を海外へ発信する機会は、別途探していきたい。

- ・懸案の版型の変更については、据え置きとしたい。
- ・編集委員からの提案：32号へ向けて、表紙の体裁を変えるかどうか（目次をつけるなど）を山川出版と検討していきたい旨、提案がなされ、会誌の装丁の検討を進めていくことを了承した。

### 3. 大会

- ・67回大会の実施経緯報告

自由報告については、応募が8本あり6本を採用した。2日目のシンポジウムについても、4月4日にプレシンポを行うなど、準備を進めてきた。しかし、急病のため報告者が1名欠けることとなり、午前中の報告を3本から2本に変更した新しいプログラムで進行することとなった。

### 6. 情報化

電子版名簿について、会報発行の度に電子版の名簿を更新していくこと、ホームページからのダウンロードができる（パスワードをかけておく）ようにすることの2点が報告された。

#### <審議事項>

##### 1. 山本達郎会員ご遺族のご寄付に関して

鈴木委員よりご寄付が入金済みである旨、報告があったのち、検討委員会の提案が示された（2日目の議論では石井米雄委員が検討委員会を代表した）。

- ・ご寄付の用途：「東南アジア史学会賞」を創設する
- ・賞の内容：賞状と副賞
- ・対象：若手の本学会会員
- ・運営方法：奨励基金を作成 10,000,000円を置き、学会賞に支出

以上の提案に対し、委員から過去に「学会賞」作成に関する議論が出た際、「異なるディシプリンのものを比較することの困難」から賞そのものの創設が見送られた経緯が指摘された。また、対象者の年齢要件、人数、副賞の額、対象となる業績の要件、推薦制採用等細部にわたって種々意見が開陳された。議論の結果、以下の諸点が確認された。

- ・過去の経緯に関わりなく学会賞の創設をめざす。
- ・狭義の歴史学に限定せず、広義の東南アジア史学を対象とし、広く会員の専門とするディシプリン全体にわたって対象とする。
- ・授与対象は学術研究とし、NGOなどの東南アジア理解の促進などは、対象外とする
- ・対象者は本学会会員とし、年齢要件は今後検討する。
- ・選考作業の省力化のためにも推薦制度を検討していく。
- ・学会賞運営のため創設した基金の名称についても検討していく。
- ・基金の原資は故山本会員ご遺族の寄付によるものであるが、他の寄付も積極的に募っていく。なお、鈴木恒之会員より本基金に対し、2万7千円の寄付があった。
- ・学会賞の規定および運営の細則等については、秋の総会に提案すべく、今後検討委員会で作業をすすめる。

## 2. 大会運営

- ・次回大会について

会場：岡山大学 2002年11月30日、12月1日

会場となる教室の収容定員（100名程度）について留意および協力を求めたい旨、会場校より発言があった。

- ・03年度の開催校としては、次の2校から了承を得ている旨、報告があった。

69回大会：東京外国语大学外国语学部 日程は調整中

70回大会：神戸大学国際文化学部 2003年12月6日、7日開催

- ・大会の改革

大会委員の提案にさきだって、会長から以下のように改革の趣旨が示された。

- (1) 会員の大会への関与が減っているように思われ、その背景には近年の狭義の「歴史学」的なシンポジウムが続いていることなどが考えられる。
- (2) そもそも、シンポジウムを半年ごとに組んでいるため、テーマの選定が難しくなってきており、プログラムがマンネリ化しがちのように思われる。
- (3) 学際的な現状に合わせて、より自由なプログラムを組んでもいいのではないか。
- (4) プログラムがタイトで、情報交換の場としての学会の役割が果たせていないうに思われ、もっと「ゆとりの時間」を作りたい。

以上に鑑み、会長・大会委員から、研究大会全体としての学際性の維持と大会に時間的余裕をもたせることを目的に、岡山大会については、試みに従来のシンポジウムに代えて自由企画を公募することが提案された。具体的な内容は以下のとおり。

- ・大会のうち年1回分は、自由な企画を奨励したい。
- ・大会委員が企画するシンポジウムについては年1回のみ。
- ・残りの1回については、会員から自由なテーマでの企画を応募する。例として、研究所データの披瀝と意見交換、科研費プロジェクトの発表、等々が考えられる。
- ・1日目の自由研究発表はこれまで通りとする。

これについて意見交換がなされたのち、以下の諸点が確認された。

- ・実施細目：大会委員と事務局で検討していく
- ・内容：シンポジウムから小規模の発表会までを範囲に入れる
- ・継続性：毎回読みきり企画とする（いわゆる「部会」形式はとらない）
- ・人数：少人数の企画でも可能とする。
- ・通知：もし了承が得られれば、応募必要事項のフォームを周知し、夏休み前に募集を行う。

### 3. 会計委員より

前期の高田委員より決算報告、嶋尾委員より会計監査報告の代読があり、原案通り承認され、総会に送られた。

つづいて、菊池委員より今年の予算について提案があり承認された後、以下の提案があり承認された。

- 1) 会費納入率を高めることを目標にしたい
- 2) 今後は、前年12月に予算の承認をもらい、6月に前年度の決算としたい。

### 4. 地区

会長より、空席となっていた北海道・東北地区委員を、宮本謙介会員に依頼し承諾を得た旨、報告があった。中国・四国地区委員の増員について八尾委員から提案があった。すでに例会の運営に携わっている泉川晋会員（広島大学・院生）が推挙され承認された。両委員とも、委任状はさかのぼって1月1日付けとする旨、確認された。

2001年度会計決算報告

2001年度 東南アジア史学会 会計決算報告（一般）

2001年1月1日～2001年12月31日

I 収入の部	II 支出の部
1. 会費 3,235,930円	1. 大会開催費 265,243円
一般 2,521,000円 (7,000×360+1,000)	大会諸費 184,343円 プレシンポ 80,900円
学生 714,930円 (5,000×143-70)	2. 地区例会費 50,000円 関東地区 50,000円
2. 会費外収入 300,750円	3. 編集・印刷費 2,499,884円
書籍販売 63,815円	会誌編集費 119,620円
著作権料 65,000円	会誌印刷費 1,933,541円
広告料 170,000円	会報印刷費 418,823円
利息 1,935円	葉書印刷費 27,900円
郵便局 1,121円	4. 情報化経費 16,674円
銀行 814円	5. 郵送費 398,000円
本年度収入合計 3,536,680円	6. 事務費 42,248円
前年度繰越金 4,359,730円	7. 予備費 47,640円
	通常事業費合計(1～7) 3,319,689円
	8. 本年度特別費 510,962円
	会長選挙費 130,412円
	名簿印刷費 380,550円
収入合計 7,896,410円	通常事業費+特別費合計 3,830,651円
III 残高（次年度繰越）	4,065,759円

第18期会計委員 高田洋子

北川香子【学会印】

会計簿、預貯金残高記載書類、領収証控帳を点検した結果、誤りのないことを確認致しました。

2002年1月28日

会計監査委員 白石昌也【印】

2001年度 東南アジア史学会 会計決算報告（研究助成基金）

2001年1月1日～2001年12月31日

I 収入の部		II 支出の部	
1. 前年度繰越金	5,236,585円	千葉芳広	34,080円
2. 寄付	4,790円	松田月子	17,860円
3. 利息	6,131円	矢野順子	33,600円
収入合計		レ・ホアン	10,725円
支出し合計			96,265円
III 残高（次年度繰越）			5,151,241円

第18期会計委員 高田洋子

北川香子【学会印】

会計簿、預貯金残高記載書類、領収書控帳を点検した結果、誤りのないことを確認致しました。

2002年1月28日

会計監査委員 白石昌也【印】

## 2002 年度予算

### 収入の部

項目	(円)
1 会費収入	3,600,000
一般 (7000×400)	2,800,000
学生 (5000×160)	800,000
2 会費外収入	267,000
書籍販売	50,000
著作権料	65,000
広告料	150,000
利息	2,000
収入合計 (A)	3,867,000
前年度繰越金	4,065,759
収入総額 (B)	7,932,759

### 支出の部

項目	(円)
1 大会開催費	400,000
大会諸費	200,000
プレシンポ	200,000
2 地区例会費	50,000×2 100,000
3 編集・印刷費	2,730,000
会誌編集費	200,000
会誌印刷費	1,800,000
会報編集費	100,000
会報印刷費	300,000
葉書・振替用紙印刷	230,000
会誌補充分	100,000
4 情報化経費	50,000
5 郵送費	420,000
6 事務費	50,000
7 予備費	100,000
通常事業費合計 (C)	3,850,000
8 本年度特別費 (D)	0
通常 (C) + 特別費 (D) 計 (E)	3,850,000
本年度收支差額 (A) - (E)	17,000
次年度繰越金 (F)	4,082,759
支払合計 (E) + (F)	7,932,759

## 第67回研究大会報告

第67回研究大会は、2002年6月1日、2日の両日、石井米雄会員を大会準備委員長として、神田外語大学キャンパスで開催された。1日目は自由研究発表およびガムラン演奏が行われ、2日目には「17世紀を再考する—「交易の時代」の終焉をめぐって」と題したシンポジウムと会員総会が行われた。

### プログラム

6月1日（土）

開会の辞 ..... 石井 米雄（大会準備委員長）

自由研究発表

A4本『大越史記続編』小考 ..... 蓮田 隆志（大阪大学大学院）

アユタヤの対明関係——外交文書から見る ..... ピヤダー・ションラオーン（広島大学大学院）

19世紀中部ジャワ北海岸におけるイスラーム指導者とブリヤイの葛藤

——アフマッド・リファイ運動をめぐる言説を分析して

..... 菅原 由美（東京外国語大学共同研究員）

バンテアイ・クデイ遺跡（シェムリアップ・カンボジア）発掘調査報告

——274破片の仏像出土からみる12世紀末から13世紀のアンコール

..... 丸井 雅子（上智大学共同研究員）

紅河平原低地域の村落形成に関する考古学的研究——ナムディン省バッコック村の調査から

..... 西村 昌也（東南アジア埋蔵文化財保護基金）、西野 範子（金沢大学大学院）

カレン系民族の分類に関する諸問題 ..... 新谷 忠彦（東京外国語大学）

ガムラン演奏 ..... スカル・ジュブン（代表・藤本 民子）

6月2日（日）

シンポジウム「17世紀を再考する—「交易の時代」の終焉をめぐって」

趣旨説明 渡辺 佳成（岡山大学）

トンキンの生糸貿易—VOC資料から ..... 奈良 修一（東方研究会）

ムラウー王朝前半期(1430-1700)における海上貿易とアラカン・エーチャン（神田外語大学）

会員総会

コメント1 ..... 永積 洋子（東洋文庫研究員）

コメント2 ..... 長島 弘（長崎県立大学）

総合討論

閉会の辞 ..... 倉沢 愛子（会長）

<自由研究発表要旨>

## A 4 本『大越史記續編』小考

蓮田 隆志（大阪大学大学院）

ベトナム前近代史研究の基本史料たる『大越史記全書』（TT）は、15世紀の成立以降、後期黎朝治下の17世紀後半に2度続修されたことが知られている。1度目は1665（景治3）年、1662年までの部分が編纂されたが、半分余りが刊刻に付されたのみで完成を見ず、秘閣に蔵されたという（景治本）。2度目は1697（正和18）年、1675年までを増修した上で、全24巻に纏めて刊行された（正和本）。そして現パリ・アジア協会蔵本が最も正和原刊本に近い版本とされている。

現在ハノイの漢文・チューノム研究院（ハンノム院）が所蔵し、A 4 の架蔵記号を附せられた『大越史記續編』なる四冊本が存在する。これは阮朝宮廷書庫蔵本の極東学院用写本であるが、現存本の構成は諸先学の紹介・考証と微妙な相違を見せており、そこで報告者は構成について若干の考証を加え、ハンノム院現蔵本は、フエ宮廷聚奎書院旧蔵「越史續編」を核とした合綴本で、極東学院用写本作成段階で別本が同綴され、更にハンノム院移管後に一旦巻頭の一部分が脱落したものと推定した。

ところで、1988年にベトナムのゴー・ティー・ロンが景治本の残巻とされる刊本を紹介した（以下「残巻」）。残存部分は1600-1643及び1655年末-56年年初にかけての部分だが、正和本とは明らかに内容を異にし、かつ詳細な記述がなされている。ロンの考証には不十分な点もあり、景治本と断定するにはなお問題がある。だが、92年に出された影印と併せて検討したところ、少なくともこの史料が後期黎朝治下で作られたTT系統の史料であることは疑いない。すなわち後期黎朝史にとって極めて重要な新出史料と言える。

A 4 本の前半部は、避諱からみて19世紀の嗣徳朝以降の写本であることは間違いない。だが「残巻」と比較したとき、若干の字句の異同を除いてほぼ完全に一致し、巻頭の書式も共通している。繫年のずれなど若干の問題は存在するが、「残巻」と同系統の史料を見て間違いない。他の部分が正和本の不完全な写しなのと異なり、この部分こそ、A 4 本の中で独自の史料的価値を有する部分なのだ。

その内容については、ペリオ以来、正和本系諸本と大きく異なることが紹介されている。しかし、先学はいずれも特に史料的価値を認めず、ために從来殆ど利用されてこなかった。ここで叙上の推定を是とするならば、我々は、正和本の記述が極めて簡潔な16~17世紀前半について、より詳細かつ独自の記述を持つ根本史料を入手することができたことになる。

## アユタヤの対明関係——外交文書から見る

ピヤダー・ションラオーン（広島大学大学院）

前近代における中国の明（1368～1644）と東南アジア諸国が、明中心の「華・夷」概念に基づく冊封・朝貢関係で結びつけられていたことは周知のことである。明とアユタヤとの関係もこの枠組みのなかにあるとされ、従来の諸研究は両王朝の朝貢貿易を中心としてその形態と時代にともなう変化を論じてきた。ただし、両国間を往来した外交文書については十分に研究されていない。本報告は、アユタヤ国王から明皇帝への文書がどのような段階を経て、どのような機関を通じて送られたか、またどのような諸種類の文書が使用されたかを考察する。具体的には先行研究者が利用した『大明実録』を再検討する一方で、『殊域周咨録』・『華夷訳語』中の「暹羅館來文」というアユタヤからの国書とその漢訳文の文例集を検討する。

『大明実録』によると、両国が使用した文書は発行者の身分と使用用途によって勅書・表文・咨文および半印勘合等に区別できる。明と朝貢貿易を行うために、アユタヤの使節はこれらの文書を持参し明側に提出する。

まず、表文はアユタヤ国王から皇帝に送る国書であり、「金葉表文」とも呼ばれる。『殊域周咨録』によると、アユタヤの使者は中国に至った際、直ちにそのまま皇帝に表文を進上するわけではなく、いくつかの役所を経る。なぜならば、表文は「回回字」と「番字」で書かれたため、明初設立された翻訳機関である四夷館の回回館の翻訳、および廣東から派遣された通事の訳を経てから進上されるからである。そして 1579 年（万暦 6・11），明が四夷館に暹羅館を増設して以来、表文は同館の漢文訳を経て皇帝に上奏されるようになった。ただし、回回館、廣東の通事および暹羅館の館員が表文の内容を正確に訳せたのかは疑問がある。暹羅館が作成した「暹羅館來文」のなかの原文と漢訳文とを比較すると、言葉づかいによって若干違うところがあり、暹羅館の館員が意図的に原文の言葉を「朝貢用語」で漢文に訳したことがわかる。

次ぎは咨文についてである。『大明実録』によると咨文は礼部とアユタヤ国王との間で用いられる書簡であるが、時々アユタヤからの咨文は国王ではなく、陪臣によって発行された。半印勘合に関しては、偽使を防止するために、明は相互に派遣される使者に勘合の持参が義務であるとする。勘合は明が朝貢諸国に給付したものであり、明の皇帝が代わることに再造し、再発給される。ただし、15世紀後半以降中国の沿海地方における密貿易が盛んになると、勘合の使用は乱れるようになる。アユタヤの勘合の使いかたも 15世紀後半ごろ以降、原則どおりではなかったことは『実録』のなかにいくつかの例がみられる。

番字と回回字で書かれたアユタヤからの国書は、明皇帝に伝わるまでいくつかの段階を経たため、その内容が若干変更されていた。また、アユタヤの外交文書の使用によって、

明の定めた文書制度は制度通りに必ずしも機能したとはいえない。明とアユタヤとは「宗主・番夷」という上下関係であるというように中国側の史料では表現されているが、アユタヤは両国の関係に関して中国の史料が述べるような認識を必ずしも持っていないといえよう。

## 19世紀中部ジャワ北海岸におけるイスラーム指導者とプリヤイの葛藤 ——アフマッド・リファイ運動をめぐる言説を分析して 菅原 由美（東京外国语大学共同研究員）

強制栽培制度の導入（1830年）に伴う植民地化の進行はジャワ社会に様々な変容をもたらした。プリヤイ（現地人首長層）は、現地人官吏となり、次第にオランダ植民地政府への依存度を深めていった。プリヤイ研究をおこなったザーランドによれば、プリヤイはジャワの宗教に伝統を持っていたが、次第に世俗化するとともに、イスラームを無視し、「ファナティックなムスリム」としてオランダが恐れる在野のイスラーム指導者を遠ざけた。一方、ジャワ社会におけるもう一つの勢力であるイスラーム指導者層は、植民地政府によって政治への関与の道を断たれた。彼らはより強く中東の思想的影響を受けるようになり、プリヤイに対する厳しい批判を展開させ、中には抵抗運動を率いる者も登場したと説明された。この歴史状況について、サルトノ・カルトディルジョは、彼の一連の抵抗運動研究のなかで、この時期の多くの抵抗運動の背景には、プリヤイと在野の宗教指導者との間の権力争いが存在したと説明した。

しかしながら、サルトノはオランダ語史料のみに依拠して研究をおこなったため、プリヤイや宗教指導者の言説が分析されていない。プリヤイが植民地支配に取り込まれた自分の立場をどのように正統化したのか、また宗教指導者はどのような思想や世界観のもとにプリヤイ批判をおこなったのかという内在する論理は彼の歴史叙述のなかには描かれていない。

強制栽培制度導入以降、プリヤイが植民地政府によって重要視されたのは、彼らによる民衆の労働力調達が作物耕作のために不可欠なものであったためである。よって、プリヤイは民衆への影響力を依然として維持していなければならなかった。そのために、ブバティは部下を駆使して社会の動向について詳細な報告を集めていた。結果として、反プリヤイ勢力が武装蜂起にまで至るケースは多くなかったが、プリヤイとイスラーム指導者の間で広げられた民衆の支持を勝ち取るための争いは、むしろ多くの場合、蜂起というかたちをとらずに展開された。たとえば、モスクやプサントレン（イスラーム寄宿塾）等でのイスラーム指導者によるプリヤイ批判などが考えられる。プリヤイはこうしたイスラーム指導者達の行動に対しても注意を怠らず、自分達の正統性を政治上だけでなく、宗教（イス

ラーム）上からも主張し、批判に対抗した。こうしたプリヤイの行動は、世俗化し、イスラームを遠ざけたとしか、これまで説明されてこなかった姿とは異なり、プリヤイが植民地官吏となった後もジャワ社会における自分達の位置を模索していた様子が浮かび上がってくる。

本報告では、在野のイスラーム指導者によって批判されたプリヤイがいかにその批判をかわし、自分の立場を正統化したか、その正統化の論理を分析し、従来のものとは異なるプリヤイ像を提示することを目的とする。事例として、1840-50 年代に中部ジャワ北海岸プカロガンで支持されたアフマッド・リファイ運動をめぐって展開したプリヤイとイスラーム指導者リファイの衝突をとりあげる。リファイはメッカ巡礼からの帰国後、プカロガン州バタン県カリサラック村において、村人に正しいイスラームを教えるために、アラビア語ではなく、アラビア文字のジャワ語（ペゴン）で多くの教本を執筆し、教育活動をおこなった。彼は特に著書のなかで、オランダと戦わないプリヤイやそのプリヤイに従う宗教役人に対し強い非難を浴びせ、民衆には彼らに従うことのないように説いていた。そのため、プリヤイの不興を買ひ、彼は 1859 年にアンボン島へ追放された。

この運動は、オランダ語史料だけでなく、リファイ本人が著した本が多数残されているため、彼の思想を分析することが可能であり、またリファイが起こした「騒動」について取り扱った宮廷文学『チャボレックの書』が存在するため、これを通して、リファイと対立した現地人植民地官吏や宗教役人の視点をも明らかにすることができる。リファイは正しいイスラーム実践のための知識修得の重要性とウラマーのあるべき姿を説き、社会を救済しようとした。一方、プリヤイはオランダ植民地政府による信頼と、マタラム以来の宗教役人パンフルの権威を正統性の根拠とし、リファイを無知で傲慢な「異端者」・「攪乱者」として、ジャワからの追放を要求した。

## バンテアイ・クデイ遺跡（シェムリアップ・カンボジア）発掘調査報告 —274 破片の仏像出土からみる 12 世紀末から 13 世紀のアンコール—

丸井 雅子（上智大学アジア文化研究所共同研究員）

バンテアイ・クデイ遺跡は、アンコール時代の 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけてジャヤヴァルマン 7 世王によって建立されたといわれている寺院である。2000 年 8 月、2001 年 3 月、そして 2001 年 8 月から 10 月にかけて実施された同遺跡における発掘調査により、仏教の石像片など 274 点が出土した。これらの仏像片は、大半が損壊を受けた状態で出土している。これほど大量の石像片が、発掘調査によって出土した例はこれまでに他では類を見ない。調査によって観察された状況をまとめ、その背景を検証したい。調査成果と、議論の焦点は以下のとおりである。

## 1. 調査成果

土の堆積状況の観察から、これらの石像群は人為的に掘られた穴に一括して埋め込まれていったことがわかっている。穴は深さ約 90cm、壁はほぼ垂直で、底は 2m 四方の大きさをもつ。この穴に石像がぎっしりと埋められ、さらに瓦や陶器片を碎いて混ぜこんだ土によって覆われている。この土は非常に堅くつき固められており、その表面からは列石が検出されている。出土した石像は、その多くが仏像であり、これまでの美術様式を踏襲するのならば、「ナーガ上に坐す仏陀」のうち 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけてのバイヨン様式に属するものが多勢をしめる。数は少ないが、それより早い時期に設定されているバプオーン様式、アンコール・ワット様式の仏像も散見される。また、バイヨン様式以後の特徴をもつ仏像も出土している。それらは大半が頭部あるいは胴部のあたりで、損壊を受けた状態で出土した。調査後の整理作業の段階で、（同じ穴の中ではあるが）離れた箇所から出土した頭部と胴部が、同一個体であることがわかったものも 2 例ある。残存している石像自体の保存状態は非常に良好である。また、東西軸に方向性をともなって埋められた大型石柱や、穴の壁に立て掛けられた大型立像などが、注目される。

## 2. 議論の焦点

出土した石像群が、大乗仏教を信奉していたジャヤヴァルマン 7 世の時にバンテアイ・クデイ寺院内に奉納されていたことは、幾つかの周辺状況の検証により確実である。一見するとジャヤヴァルマン 7 世王の死後に即位した、シバ教徒の王による偶像破壊行為とも受けとめられる。しかし、壊れた状態の石像、ほぼ完全な状態で出土した石像、壊れているが一括遺物として頭部と胴部が復元できた仏像、など石像の状態は様々である。また、方向性を意識して埋められた石柱、壁に立て掛けられた仏像、など埋納にも配慮が伺える。石像を壊した「人」および「時期」と、穴を掘って埋めた「人」および「時期」は、区別して理解すべき問題である。考古学的に年代を確実に決定できる遺物は供出していないが、当時の歴史背景とも併せて、この石像群埋納という状況を解釈し、バンテアイ・クデイ遺跡そのものにおける位置付け、およびアンコール史全体における位置付けを考えてみたい。

資料：

Masako Marui, 2001 a, "Buddha Statues excavated from Banteay Kdei temple, on 30th and 32nd mission (2000-2001)," Renaissance Culturelle du Cambodge, vol. 18 (Tokyo: Institute of Asian Cultures, Sophia University, 2001)

# 紅河デルタの村落形成に関する考古学的研究

——ナムディン省バッコック村の調査から

西村 昌也（東南アジア埋蔵文化財保護基金）

西野 範子（金沢大学大学院）

## はじめに

村落が社会単位として非常に大きな意味を持つベトナムにおいて、一つの村落を各分野から検討することは、ベトナムの社会を理解する上で重要である。しかし、これまで、ベトナムはおろか東南アジア全体でも一つの伝統村落をその形成開始期から現在まで、考察したものは無い。理由は文字等の資料の不完全さゆえである。本研究は文字資料とは全く別に、物質文化を基準とする考古学で、一つの村落形成史を“測量”するとどうなるかということを目的にしている。

## 地理的歴史的背景

ナムディン省ナムディン市郊外のナムディン川を南境とするタインロイ (Thanh Loi) 社は紅河平原デルタ域に属している。当地域では残丘部を除いて、各集落は自然堤防などの微高地上に立地している。ズオンライ (Duong Lai) 集落が立地する微高地は完新世半ば以前より形成された時期的に古い砂礫列だが、バッコック村（旧百穀村）は現ナムディン川の旧流である Coc 川の緩い自然堤防沿いに形成された集落である。この自然堤防は完新世半ば頃から形成されたと考えられる。コック川から、現ナムディン川への流路変化はそう遠くない時代のものと考えられ、フーコック集落（旧富穀社）はその過程で形成された自然堤防上に立地している。

文献史からの研究は、バッコック集落の開祖を陳朝期に移住してきた集団であること、百穀社、富穀社とともに 16 世紀には存在したこと、北接するタンコック（旧小穀）集落はバッコック村からの分村伝承を持つことを明らかにしている。また、デン（神社）などの村落信仰守護神に黎大行の皇后楊文娥や范百虎（十二使君の一人）などの 10 世紀の人物が祀られ、黎朝開国功臣の裴於臺がもともと村の守護神主神であったことなども、聞き取り等から明らかにしている。

## 発掘調査所見

1996 年から 2000 年にかけてバッコク村が位置する微高地 6 地点：北からソムナー (XA 地点)、ソムベー (XB 地点)、ソムセー・サンカオ (XCSC)、ソムベング (XBN1-2 と XBN3 地点)、西隣のズオンライ集落のズオンライゴアイ (DLN 地点)、ズオンライチョン (DLT 地点) の 2 地点、東隣のフーコック集落 1 カ所での小規模な発掘調査と周辺域の表採調査

を行った。

バッコック微高地 XA 地点は、現墓地に南接したところだが、17 世紀初頭頃を最古とする、墓群が確認された。具体的居住面は確認されず。XB 地点では 17 世紀に、盛り土による居住面を造成した後、連綿とした居住面が確認された。XBN1-2 地点、13 世紀から 15 世紀にかけて形成された廃棄坑が確認された。XBN3 地点では新石器時代の多少の遺物の確認があった。14 世紀を下限とする土間式住居が確認された。XCSC 地点では 17 世紀を下限とする遺物群が確認され、もともと低湿地のような場所を、盛り土により埋め立てて居住面を造成している。Phu Coc 地点では居住開始が 17 世紀までしか遡らず、19 世紀末から 20 世紀前半にかけての高級陶磁器を含む多量の遺物廃棄群が確認された。DLT 地点では、13-14 世紀を嚆矢とする連綿とした居住面形成が確認された。18 世紀の住居址では家の基礎に護符を壺等に入れて埋納する遺構も確認された。DLN 地点では、3-5 世紀に比定可能な磚が出土。また 11-12 世紀頃に形成された土坑が確認され、19 末-20 世紀に比定可能な建築基礎とそれに伴う高級品を含む大量の陶磁器を確認した。

#### 陶磁器、水上交通と遺跡機能

年代判定が最も行いやすい施釉陶磁器の碗皿資料を時期別に分けて統計をとり、各地点の居住頻度を判断すると以下のようにたどれる。

1：バッコック微高地の中央部では新石器時代に小規模な居住が存在。これは紅河デルタ居住域の最前線に位置していた可能性あり。

2：ズオンライ、バッコックとともに 1-10 世紀の居住痕跡を残す。特に 8-9 世紀以降になるとバッコックの XBN 地点での居住が明瞭となるが、ズオンライではほとんど居住がみられない。

3：11-12 世紀になるとズオンライでの居住が再び明瞭化するが、バッコックの XBN は安定した居住が存在したようだ。

4：13 世紀後半以降は XBN 地点での居住規模が拡大化し、14-15 世紀にその最盛期を迎えている。

5：16 世紀以降は XBN 地点での居住頻度は前段階に比べ衰退するが、20 世紀まで連綿と居住は続く。XBN 地点以外のバッコック各地点では 17 世紀以降の居住頻度が増加をし、フーコックやタンコック現集落の居住も開始される。

生産地（国外かヴェトナムか）、稀少器種を陶磁器の質の判断基準にした場合、9-11 世紀と 14-15 世紀の XBN 地点が他を圧倒している。また、運搬容器である無釉陶器は 13-15 世紀の XBN 地点が他を圧倒している。これは当地点が川縁の船着き場で、交易や物流の中心であったことを示している。さらに、19 世紀末から 20 世紀前半のフーコック地点とズ

オンラインの DLN 地点では各種のヴァラエティに富んだ陶磁器を出土しており、豪農や里長の居住地であったことを裏付けている。物質文化や居住の形態から富裕者がいたと明らかに指摘できるのは上記の 14 世紀から 15 世紀前半の XBN 地点と 20 世紀初頭の DLN 地点と PC 地点のみである。

#### 他遺跡史料や他分野史料との対照

XBN 地点での 13 世紀以降の居住活発化は裴允族などの陳朝期の移住と整合性をもつていいよう。交易や物流に基づくであろう 14-15 世紀の XBN 地点の繁栄は、同時期の科挙合格者、裴募、裴光家そして黎朝開国功臣、裴於臺 3 人を輩出した経済的背景になっていると考えられる。ナムディンの天長府周辺は皇族の荘園（田庄）伝承を残しているが、当村落には皇族関係のものではないが、13-14 世紀段階に陳朝配下の集団による、交易の要所を利用した形での本格的開拓が行われた可能性は十分あろう。天長府外港と考えられるバイハラン遺跡は、XBN 地点よりさらに高級な陶磁器が出土している。しかし、存続期間において、バイハランは 13 世紀第 2 四半期くらいから 14 世紀前半に限定されるのに対し、XBN は 15 世紀まで連綿と利用されている。これはバイハランが天長府の実質的活動期間に影響されているのに対し、XBN 地点が陳朝皇室とは違った勢力下のもと、交易拠点として機能していた可能性を示している。また、10 世紀の前黎朝や 12 使君関係の伝承も、XBN の考古学資料が示すように、水上勢力との関係を反映したものだ。

17 世紀のある時期にバッコクとその周辺域は新村設立と居住域の拡大を、盛り土などによる居住面の高レヴェル化で実現している。この現象はハイズオン省、バックニン省、ハノイでも確認でき、紅河平原全域での現象である。筆者はこうした集落の高レヴェル化が、堤防の完全輪中化（馬蹄形型輪中から閉鎖型輪中）などの堤防体系の進化を意味しているのではないかと考える。こうした現象を通じて、現在に通じる集落景観ができあがったようだ。文献史からはあまり言及されない 17 世紀だが、紅河平原域の集落史における大きな画期であることは間違いない。

#### カレン系民族の分類に関する諸問題

新谷 忠彦（東京外国語大学）

カレン系民族は、ビルマ、タイに数多く分布しているが、その実体はあまりよく分っていない。こと言語に関しては、これまで信頼に足る資料の存在するグループはスゴー・カレンとポー・カレンくらいで、この他にはパオについてのデータが若干存在する程度であった。特にパダウン語やパクー語などをはじめとする Central Karen と呼ばれているグループについては、まともなデータが殆んど存在していなかった。しかし、近年、

Henderson(1997) や Solnit(1997) の研究成果が公刊され、更には発表者自身の長期間に渡る断続的な調査などによって、少しづつ科学的なデータが入手できるようになってきた。カヤー州やカレン州などに住むカレン系民族の小さなグループについては自称、他称、別称が多数入り乱れており、一体幾つのグループが実際に存在するのかについてもよく分つていなかったが、発表者自身がフィールドワークで得られたデータを吟味整理した結果、ひとまず 15~20 程度のグループの存在を確認するとともに、その言語の素姓をある程度知りうる状況になってきた。今回の発表では、先ず、Central Karen と呼ばれているグループに焦点を当て、彼ら自身が自分たちをどのように分類しているのかを紹介し、その分類を言語データによって検証する。カレン系民族自身の分類については、発表者が各地で接触できたカレン系民族とのインタビューの内容を整理したものである。言語による分類については、各言語の音韻体系、声調分岐及び音韻変化のパターン、基礎語彙を比較することによって言語間の親疎を測る古典的な手法を用いる。その結果、彼ら自身の分類と言語による分類が必ずしも一致していないことが分ってくる。更にこの方法を拡大し、カレン系言語全体をどのように把握・分類したらよいかを検討する。その結果として、Central Karen といった分類があまり合理的な分類ではないことが分ってくる。また、同じ地域に住む大多数の民族については、中国に同じか、または近い民族がいるのに対して、カレンは中国に同一または類似の民族を全く持っていない。このような状況をどうとらえたらよいのであろうか。こうした問題についても、最新の言語データを使って、手掛かりがつかめないか検討する。使用する言語データは、殆どは発表者自身の断続的なフィールドワークによって得られたデータであるが、一部 Henderson(1997) 及び Solnit(1997) のデータも使う。

## シンポジウム

### 《17世紀を再考する——「交易の時代」の終焉をめぐって》

#### 趣旨説明

渡辺 佳成（岡山大学）

東南アジアの歴史像は、大きく塗りかえられようとしている。ケンブリッジ、山川の東南アジア史、岩波の講座東南アジア史などの出版によって、その歴史を総合的に把握することが容易になり、個々の研究者は自らの専門とする時代、地域の歴史像を全体の中に位置づけ検討を加えることによって、研究を深化させることができたようだ。

しかしながら、各書で示された東南アジア史の全体像は必ずしも一様ではない。長期的に地域全体にわたる変化をどのように捉えるのか、その要因と各地域への影響をどの程度評価するかによって、時代区分のあり方は異なっている。こうした研究状況の中で、東南アジア史の時代区分の妥当性を検証する第一歩として、本シンポジウムでは、「交易の時代」に焦点をしづらって、検討を加えていきたい。

植民地期以前の東南アジア史の研究で、従来の歴史観に革命的変化をもたらしたのが、リードの提唱する「交易の時代」という時代区分であることは、言うまでもない。そこでは、15世紀以降急速に発展していく国際交易が東南アジアの各地域に大きな変化をもたらしたことが明らかにされ、その特徴が以下のように説明される。商業の活況とコスモポリタン的都市の繁栄、域内の交流の緊密化とイスラームなどの世界宗教の普及、交易のもたらす富と火器の普及による新たな「集権的」国家の誕生などの事象が東南アジア全体を通じて起こり、経済、文化、政治の諸側面に明らかにそれ以前の時代との画期が見られる。そして、世界史的な「17世紀の危機」の中で東南アジアが国際交易から撤退していくとともに、こうした動きは減速していく、17世紀末には、「交易の時代」は終焉を迎える。

そこで明らかにされた時代相は、単に東南アジア史の枠組みに止まらず、東南アジアを世界史の議論の中に組み込んでいく上でも重要な示唆を多く含んでいる。近現代に直接つながる「伝統社会」が形成された時代として「近世」を再検討しようという議論に、東南アジア史が積極的に関わっていく基礎が「交易の時代」論によって用意されたと言ってよいだろう。しかし、そこには、なお検討を要する課題が多く残っていることも事実である。

まず問わねばならないのは、時代区分の妥当性、なかでも、「交易の時代」の終焉についてである。その変化は一様ではないし例外も存在するが、東南アジア島嶼部については、17世紀に画期を求めるることはほぼ間違いないように思える。しかし、大陸部については、諸変化の要因としての交易の持つ比重が島嶼部とは異なり、17世紀末に画期を設けることに意味があるのか疑問が残るところである。

そこで、本シンポジウムでは、17世紀の東南アジア大陸部に焦点をしづらって、時代の諸

相に検討を加え、この問題を考えていきたい。具体的には、トンキン、アユタヤ、アラカン（ビルマ）を取り上げ、交易の有り様の変化について検討を加えるとともに、そうした変化とそれぞれの地域における経済、政治をふくめた社会全体の変化の間に密接な関連性が見られるのかについて報告を受け、そこから 17 世紀という時代を考え、18 世紀以降の時代とはっきりと時代区分することが可能なか検討を加えてみたい。

## トンキンの生糸貿易——VOC 資料から

奈良 修一（東方研究会）

「近世」の海上貿易において、重要な交易の一つは、「糸銀貿易」といわれる、シナ海をまたぐ生糸貿易であろう。16 世紀以来、貨幣経済を発展させた江南地域では大量の高品質の生糸を生産する。それを金銀産出地である日本が輸入したのである。

この貿易自身は、中国と日本の直接交易が可能であれば、東シナ海だけの貿易であったが、後期倭寇といわれる密貿易が盛んになったことから判るように、寧波の乱以降、明朝と日本の直接交易は不可能になっていた。それゆえ、台湾やトンキンを迂回する交易が盛んとなる。

17 世紀になりオランダ東インド会社（VOC）がこの地域の貿易に参入してくる。最初、中国との直接貿易を希望し、交渉を行っていたが成功しなかった。そのために、日本との貿易に中心を移し、生糸を持ち込み、金銀と交換するようになった。この貿易においても、台湾を中継基地とし、中国の生糸の他、トンキン生糸を商っていた。

17 世紀半ばの明清交代期において、江南地域からの生糸が手に入りにくくなると、その分、トンキン生糸の重要性が増した。それまで、トンキン商館は日本商館の支店的存在であったが、1650 年から独立の商館となった。

しかし、このトンキン商館の最盛期も 17 世紀中葉の短い期間だけであった。というのも、もともとトンキンで産出される生糸の質があまり良くなく、また、中国商人との競争において、VOC は必ずしも有利な立場を築き得なかつたからである。

VOC にとっては幸いなことに、別の場所で生糸を得ることができた。それがインドのベンガルである。この地で生糸を得るばかりでなく、日本向けに生糸を製糸する工場を造り、さらに、日本から得た銀をベンガル向けに貨幣に鑄造する工場まで設けたのである。これにより、17 世紀後半において、VOC の対日生糸貿易の拠点はトンキンからベンガルに移る。

1683 年、鄭氏の台湾が清朝支配下に入ってからは、中国商人が自由に海外にでられるようになり、多くの商人が日本に来航した。大量の金銀が海外に流出することを畏れた江戸幕府は貿易に制限を加えるようになり、長崎を通じての生糸貿易は減少することになった。このために、VOC の対日生糸貿易も打撃をうけることとなり、トンキン商館の持つ意味は

ますます減少した。かくして、1699年にこの商館は閉鎖されることとなり、VOCの貿易ネットワークからトンキンはその姿を消していくのである。

## ムラウー王朝前半期(1430–1700)における海上貿易とアラカン

Aye Chan (神田外語大学)

アラカン山脈とベンガル湾の間に細長く横たわるアラカンでは、農業社会が発展してきたが、1430年にベンガルの軍事的援助のもと建国されたムラウー王朝は、ベンガル湾における強国として発展していく。16世紀には、国際交易と深く関わっていき、国家の独占下で行われる貿易から得られる利益や税収の増加は、王国の発展の大きな要因の一つとなっていく。建国当初よりベンガル東南部への勢力伸長に熱心であったムラウー王朝は、1531年、チッタゴンを支配下に収めることに成功し、それ以降、アラカンは、ベンガル湾交易において重要な位置を占めるようになる。

チッタゴンは、ムラウー王朝の支配下で、ベンガル地域の商業的中心として繁栄し、アラカンにおける鋳造貨幣の使用と流通は、王国の対外交易の発展をさらに促進させることになった。かつてのアラカンの交易相手は、そのほとんどがゴルコンダのインド商人であったが、そこにポルトガルが参入してきた。17世紀初頭にオランダがアラカンとの貿易に参入すると、ポルトガル人の多くは海賊行為に従事するようになり、ガンジス・デルタを襲い、捕らえられた人々は奴隸として売却されていった。その奴隸の市場として最も大きな位置を占めたのが、ムラウーであった。

オランダにとって、アラカンとの貿易は二次的な重要性しか持たなかったが、そこで取り引きされた主要な商品は、米と奴隸、ラックなどであった。ムラウー王朝では、これらすべての商品が王の独占下に置かれたが、オランダは忍耐強く貿易を続け、アラカン王国が1660年代半ばにムガルとの戦争に敗れチッタゴンを喪失するまでこの関係は継続していく。

こうした動きを見てみると、アラカンは、アンソニー・リードが「交易の時代」と呼んだ時期に、海上交易から、多くの恩恵を受けているように思える。この時代に、アラカンのムラウー王朝は、政治制度、社会・経済構造、文化のそれぞれにおいて、大きな変化を体験している。たとえば、社会全体としては仏教的要素を基本的に維持しつつ、政治的局面では、ベンガルとの緊密な商業関係、文化接触によって、イスラムの思想が大きな意味を持つようになったし、王都のムラウーは、17世紀のビルマのどの都市よりもコスモポリタン的要素を持つ都市であった。本報告では、こうした諸側面を検討しつつ、この時期のアラカンに、リードの提示した島嶼部の歴史像との類似性が見られるのかを、検証ていきたい。

### 東南アジアの中国語出版物——立教大学所蔵「Goh Collection」について

舛谷 錠（立教大学）

東南アジアの出版物のうち、現地語や欧米語については各地の国立図書館や大学図書館の収集範囲であり、現地に行けば何とか利用できることも多い。しかし、東南アジアの中国語出版物については、系統的でないのはもちろんのこと、継続的に収集が行われていないことさえしばしばある。また、現物があっても未整理で利用できない場合も少なくない。新聞、雑誌などの定期刊行物については、1950、60 年代華字紙の現物が中国の廈門大学南洋研究院に、旧英領の華字紙のマイクロフィルムがイギリスの British Museum (News Paper Library) に所蔵されている場合もある。しかし、単行本については、そもそも自費か助成金出版で、出版社が版を重ねることもほとんどなく、最初の刷部数も千部未満で、時代を遡っての収集は非常に困難である。書店で買うというより、むしろ直接個人からもらいうけるという形態が収集の決め手となっていた。こうした東南アジアの中国語書籍のありかたは、国内では京都大学東南アジア研究センター図書室などが所蔵しているタイの葬式本に酷似していて、葬儀の引き出物として死後に配布されるか、名刺代わりに生前に配付されるかという違いしかないような、自伝的な内容の書籍も少なくない。

華語小学校から政党まで、華語系華人向けに揃えているマレーシアにしても、過去の出版物を手に入れるのは至難の技で、たとえば筆者が研究対象とする馬華文学（マレーシア華語系華人文学）では、せっかく文学史を整理し学校で教えていても、古典に当たる作品を読ませることができないという憾みがある。こうした状況を開拓すべく、1998 年にはジョホールバルの Kolej Selatan (南方学院) 内に馬華文学館が開設された。この施設は 1940 年代以来のマラヤ～マレーシアおよびシンガポールの華語文学出版物 3000 冊以上を収め、閲覧用はすべて複写本を作成するという念の入れようで、資料の利用とともに保存を重視している。全国組織であるマレーシア華文作家協会のバックアップもあって集められた蔵書だが、そのほとんどは元マラヤ大学教員の吳天才氏の 40 年におよぶ足で稼いだ収集の成果である。吳氏は母語である中国語の他、国語であるマレー語でも詩を中心に創作を発表している実作者でもあり、国立言語図書研究所と連携したマレーシア翻訳と創作家協会の有力メンバーとして、馬華文学とマレー文学の相互翻訳に尽力している。かつてはマラヤ大で馬華文学、中国文学を講ずるとともに、各地へ赴き精力的に中国語書籍を収集されてきた。その成果は 1934 年以来 40 年間の馬華文学書目である『馬華文芸作品分類目録』(マラヤ大中文系叢書、1975) にもまとめられている。マラヤ大学退職後、吳氏の蔵書はシンガポールの南洋理工大学中華語文文化センターに引き取られるはずだったが、文化財

の流出を危惧したマレーシア華人社会がメンツをかけ、シンガポールの一歩手前、ジョホールバルで食い止め、文学館として保管されることになったとのことだ。

ところが呉氏は複数冊の収集を常としており、馬華文学館入りした蔵書の相当部分についても、複本があることが判明した。立教大学では 1999 年度にこれらの蔵書の購入を決め、2000 年の受入れ以来整理を進め、このほど一般の利用が可能になった。日本に渡ってきた「Goh Collection」は約 1500 タイトルで、書籍の他に文芸誌も含まれている。また、マレーシア、シンガポールの他、フィリピン、タイ、インドネシアの中国語書籍が全体の一割を占めているのも特徴である。前述のような経緯もあり、現地華字紙には、氏が外国に高く売り付けたのではないかという中傷記事も見られたが、現在の書籍単価に比して全く適正な、むしろ安価に提供されたことを記しておく。呉コレクションはすでに立教大学蔵書目録検索 <<http://opac.rikkyo.ac.jp/>> や雑誌以外は NACSIS Webcat<<http://webcat.nii.ac.jp/>>でも検索可能で、今後は目録または文献解題を作成することも予定している。

(masutani@rikkyo.ac.jp)

## ベトナム農民・農村に関する国際シンポジウム

小川 有子（東京大学大学院）

2002 年夏、オランダのライデン大学にて国際シンポジウム "Vietnamese peasants' Activity, An interaction between culture and nature" が開催され、ベトナムの農村研究者が数多く集まる貴重な機会となった。ベトナムの村落研究という比較的限定したテーマを取り上げることは、ベトナム国外で組織される国際シンポジウムとしては珍しいと言え、ここにその概要を紹介したい。

このシンポジウムは 8 月 28 日から 30 日まで、ライデン大学の IIAS (The International Institute for Asian Studies) とその客員教授である桜井由躬雄氏（東京大学）が、CNWS (Research School of Asian, African and Amerindian Studies)、KNAW (The Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences)、NWO (Netherlands Organization for Scientific Research) の後援を得て主催し、90 年代に入って劇的に変化したベトナム研究の状況を踏まえて、この 10 年間の村落研究の成果を総括する目的で行われたものである。

発表者には、ペーパーの提出者やコメンテーターを含めて 10 カ国（アメリカ、イギリス、オーストラリア、オランダ、カナダ、ドイツ、日本、フランス、ベトナム、ロシア）から 37 人の参加があり、各セッションの議長は桜井氏の他、Nguyen The Anh 氏（ソルボンヌ大学）、Emmanuel Poisson 氏（パリ第 7 大学）、Hy Van Luong 氏（トロント大学）、Li Tana

氏(ANU)、Terry Rambo 氏(京都大学)、Oscar Salemink 氏(アムステルダム大学)らが務めた。

シンポジウムの3日間には、全四部13セッションが組まれた。

〈Session 1〉 Opening: Bach Coc, Methodology and Results

Part I : Villages in Historical Perspective

〈Session 2〉 Landscape

〈Session 3〉 Early Settlement

〈Session 4〉 State and Village

Part II : Inside Village

〈Session 5〉 Activity of Bach Coc Society

〈Session 6〉 Village Women's Activities

〈Session 7〉 Villages' Activity for Society

Part III : Beyond Village

〈Session 8〉 Rural - Urban Relations

〈Session 9〉 Villages' Activity for the Environment

〈Session 10〉 Migration

〈Session 11〉 Exchange of Values

Part IV : Discussion

〈Session 12〉 Discussion

〈Session 13〉 Close

日本からの参加者は主に、桜井氏が9年間継続して調査しているベトナム紅河デルタの一村落「バッコック村」調査団のメンバーで、ここではバッコックにおける各自の研究テーマに関する調査報告を行った。報告されたテーマは多岐にわたり、全体として一村研究の在り方を提示しているため、バッコック調査にとってこのシンポジウムは、集大成の第一歩と言えるだろう。各国の発表者の報告も、その多くが数年間にわたるフィールドワークの成果であり、これまで発表の場を共有することができなかったために出会わずにいた研究が、一同に会した観があった。

部会ごとの分割を避け、全員参加でディスカッションができたことから、またベトナムと異なり当地においては、メンバーのほとんどが中座するような用事を持ち合わせないことから、また好天にも恵まれ、シンポジウムは和気藹々と展開した。しかしこうした親密な雰囲気が生まれた最大の理由は、今年に入ってから開催直前まで、メール上で頻繁に連絡を取り合ってきたことにある。プログラムはメールで議論検討の上、繰り返し修正がなされた。各自のアブストラクトやペーパーは予め参加者にファイルで送信され、情報交換

や議論が行われたことなどから、準備段階から参加者間に一定の関係が築かれ、シンポジウム成功につながったと言えるだろう。

ただ、それぞれのセッションごとに討論の時間が設けられている丁寧な構成になっていたにもかかわらず、広がりのある議論に展開する時間的余裕がなかったのが一つ残念だった点である。

来年にはベトナムで、再び村落研究をテーマとする国際シンポジウムの開催が計画されているとのことで、次回もまた活況が期待される。

---

## 地区例会報告

---

### 関東地区

中原 道子、奈良 修一

早稲田大学 22 号館を会場に行っている。2002 年 4 月から 9 月までの活動内容は、以下のとおりである。

2002 年 4 月 27 日（土）

報告 1 :

菅原 由美（東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程）

オランダ植民地期ジャワにおけるイスラーム指導者—プリヤイ間の対立—アフマッド・リフアイ運動を事例として—

報告 2 :

山本 博之（東京大学大学院総合文化研究科助手）

英領北ボルネオ（サバ）におけるバジャウ人アイデンティティの形成

2002 年 5 月 25 日（土）

報告 1 :

篠崎香織（東京大学大学院）

「マラヤにおける華人社会のリーダーシップ——1890—1910 年のペナンとシンガポールをケースとして」

報告 2 :

Dr. Wu Xiao An（京都大学東南アジア研究所招待学者）

“A Mandarin-Entrepreneur To Nanyang: The Chong Family Business Network 1857-1916”

2002 年 6 月 22 日（土）

報告：豊田和規（群馬高専）

「バリ王朝年代記に見られる「マジャパイト征服神話」」

2002年9月28日（土）

西芳実（東京大学大学院）

「インドネシア独立戦争期アチェにおける指導性——ズアマー概念の導入による再検討」

## 中部地区

大橋 厚子、加納 寛

2002年4月以降の活動は以下のとおりである。

第162回 2002年4月20日（土）

高橋公明（名古屋大学）・ 大橋厚子（名古屋大学）

「これからは東南アジア史・日本史蜜月時代」

第163回 2002年5月25日（土）

池内 敏（名古屋大学）

「ベトナムと日本と漂流記」

第164回 2002年6月8日（土）

高畠 幸（日本学術振興会・大阪市立大学）、阿部亮吾（名古屋大学環境学研究科研究生）

「名古屋のフィリピン人社会—相互扶助組織を中心に」

コメンテーター：都築くるみ（愛知学泉大学）

第165回 2002年9月21日（土）

劉京宰（名古屋大学大学院）

「中国朝鮮族の宗族とエスニック・アイデンティティに関する研究報告」

コメンテーター：立本成文（中部大学）

## 関西地区

深見 純生、岡本 弘道

2002年4月以降の関西地区的活動内容は以下のとおりである。

第284回 2002年4月20日（土）

書評『岩波講座 東南アジア史4 東南アジア近世国家群の展開』

評者：渡辺佳成（岡山大学）、武内房司（学習院大学・中国西南・大陸部東南アジア史）、坂本優一郎（京都大学・近世イギリス史）

第285回関西例会

2002年5月18日（土）

松井 生子（甲南大学大学院）

「生活世界と国家の外縁—写真で見るベトナム北部山地・ラオカイ省バッカハ一県」

コメント：蓮田 隆志（大阪大学大学院）

第 286 回 2002 年 6 月 15 日（土）13:30—19:00

書評『岩波講座 東南アジア史 5 東南アジア世界の再編』

評者：八尾隆生（広島大学）、大橋厚子（名古屋大学、インドネシア近代史）、村尾進（天理大学、都市広州史・清末思想史）、吉澤誠一郎（東京大学、中国近代都市史）

第 287 回 2002 年 7 月 13 日（土）

河原林直人（龍谷大学非常勤講師）

「台湾茶貿易から観た台湾と南洋の関係；戦間期を中心として」

第 288 回 関西例会 2002 年 9 月 21 日（土）

書評『岩波講座東南アジア史 6 植民地経済の繁栄と凋落』

評者：早瀬晋三（大阪市立大学）、重松伸司（追手門学院大学・ベンガル湾海域交流史）、籠谷直人（京都大学・日本経済史）

#### 中国・四国地区

八尾 隆生、泉川 普

2002 年 4 月から 9 月までの SEAF（東南アジア談話会）の活動内容は以下のとおりである  
(会場はすべて広島大学東千田校舎)。

第 76 回 2002 年 4 月 27 日（土）

蓮田 隆志（大阪大学大学院）

「A4 本『大越史記續編』小考——近世ベトナム史に関する新史料」

第 77 回 2002 年 5 月 11 日（土）14:00—17:00

ピヤダー ションラオーン（広島大学大学院）

「アユタヤの対明関係——外交文書から見る」

第 78 回 SEAF 研究会

2002 年 6 月 22 日（土）

久賀みず保（広島大学大学院）

「輸出農産物産地における再生産構造の形成に向けて——タイ・日無農薬バナナ取引から学ぶ」

第 79 回 2002 年 7 月 27 日（土）

高谷紀夫（広島大学）

「1982 年ビルマ（ミャンマー）市民権法を読む」

第 80 回 2002 年 9 月 14 日（土）

福島聰子（広島大学大学院）

「2001 年のパリ——日本人の見たパリ」

## 九州／沖縄地区

伊野 憲治

活動状況は、以下のとおりである。

2002年4月20日（土）

松永典子著『日本軍政下マラヤにおける日本語教育』（風間書房、2002年）の書評会

評者：石井由香（立命館アジア太平洋大学），清家久美（同），田村慶子（北九州市立大学法学部）

---

### 新入会員・住所変更など（2002年4月から2002年10月確認分まで）

---

1. 電子メール
2. 現住所（電話，FAX）
3. 所属（住所，電話，FAX）
4. 専攻分野（研究課題）











---

## 事務局から

---

- ・ 転居先不明の場合、会誌、会報等、各種発送に支障をきたします。ご面倒でも、転居・転勤などの通知先に本学会事務局も加えていただきますようお願いいたします。
- ・ 学会財務の強化をめざしています。会費を滞納されている方は納入をお願いします。

郵便振替：口座番号 00110-4-20761 東南アジア史学会

- ・ 会員、一般からの学会へのメール窓口は

jssah@ml. rikkyo. ne. jp

- ・ 会報へのご投稿のお願い

事務局では、『会報』の内容充実のため、資料・短報欄へのご寄稿をお待ちしております。1. 新資料（史料）に関する情報、2. 探求資料（史料）の公開検索、3. 内外での研究集会に関する情報や紹介、4. 特定分野にかかる内外の新しい研究動向、5. 研究ノート、などをよせください。投稿方法は以下のとおりです。

字数 2000字程度

締め切り 每年3月末と9月末（それぞれ5月、11月発行の『会報』に掲載）

※ 原稿は入力データを添えてください。

東南アジア史学会会報 第77号  
2002年10月発行

発行者 東南アジア史学会事務局（会長 倉沢 愛子）  
住所 〒108-8345 東京都港区三田2-15-45  
慶應義塾大学言語文化研究所 嶋尾研究室内  
電話 03-5427-1458  
ファクス 03-5427-1594  
e-mail jssah@ml. rikkyo. ne. jp  
郵便口座 00110-4-20761 東南アジア史学会